AROUND THE WORLD

アフリカの手話の世界探訪[2]

9 ろう者の村・ガーナ

亀井伸孝　Kamei Nobutaka　（関西学院大学）

国名「ガーナ」の手話表現

「ようこそ。どうぞ，ここへおかけください」

「やあやあ」「やあやあ」（握手，握手，握手…）

ガーナの首都アクラ近郊の，ある農村を車で訪れた。こういう気さくな村人の歓迎は，アフリカの村ならどこでもよく見られることである。ただし，今回は一つだけ違う点があった。村人の会話がすべて手話だったのである。

この村では，遺伝で耳が聞こえない人が代々生まれるため，村独自の手話ができ，耳の聞こえる村人たちも手話を話している。私たちが短時間おじゃましたとき，家々の陰からにこやかに現れた村人たちの多くがろう者だった。

手話は，世界各地の耳の聞こえない人たちの間で生まれた自然言語である。ろう学校など，都市部のろう者の集まりでできた手話もあれば，先天性のろう者が多くいる村で自然とできた手話もある。アメリカ，インドネシア，メキシコなど，各地に似たような村があったとされるが，近代化と村の変容の中で消滅した手話もある。

「子どもたちは，町のろう学校の寄宿舎にいるんですよ」

ガーナでは政府によりろう教育が整備され，ろう児は無償でろう学校に通うことができる。学校で使われているのは村の手話とは異なる「ガーナ手話」で，ろう教育の成立とともに生まれた都市部の手話だ。最初のろう学校がアメリカ人ろう者の尽力により設立されたことから，ガーナ手話はアメリカ手話の影響を受けている。町のろう者たちと仕事をしてきた私は，ガーナ手話は話せるが村の手話はわからないので，訪問のときは両方を話せるろう者に同行してもらい，二つの手話の間の通訳を通して村人と話した。

ガーナ，東部州のろう者の村（2006 年，著者撮影）

ガーナ手話もこの村の手話も，どちらもガーナのろう者たちが作り，伝承してきた言語であることに変わりはない。一方は町の手話として多くの外来の語彙を取り入れ，学校の教授言語となった。一方は村の暮らしになじむ手話として代々村のろう者の間で伝えられ，話されてきた。

「町のろう者の方が来て，村にキリスト教会を建てました。私たちはそこでガーナ手話を勉強しました」

村の生活文化と言語の変容のきざし。そこに「知られざるもう一つの近代化」がうかがえるようでもある。

手話の世界にも多言語世界が広がり，制度の保護を受ける言語とそうでない少数言語がある。そこには音声言語世界にもよく似た，言語どうしの関係をめぐる難しい問題がある。

表紙写真について

FA Premier League

編集部

日本のＪリーグにあたる（といっては，向こうが本家本元なので，おこがましいが）イングランドの FA プレミアリーグ（FA Premier League）は，セリエ A，リーガ・エスパニョーラなどと並ぶ世界最高峰のサッカーリーグだ（イングランドではサッカーはフットボールという）。

写真は，前年のシーズンで優勝したチェルシー FC のホームグランド，スタンフォードブリッジ（Stanford Bridge）の客席からの光景。撮影当日は，チェルシーとフルハム戦。冬の雨がときおり激しく降る荒れた天気で，ピッチに立っている選手たちはびしょぬれであったが，客席は屋根が完備していて快適に観戦することができた。選手たちに申し訳ない気にもなったが，雨など気にする様子もなく，彼らはひたすらたたかっていた。

筆者は，前から４列目の席からの観戦で，まさに目の前を選手が駆け抜ける迫力を味わい，男たちのたたかう表情までもが見て取れた。日本ではサッカースタジアムといえば観客席とピッチの間に溝があったり，競技場ではトラックが間に入ったりが普通だが，そうした観戦に慣れたものとしては，当スタジアムの観客席とピッチの近さに驚き，かつ興奮してしまう。さらに，客席とグランドの上下の位置関係もすごい。観客席最前列のフロアは，ピッチの地面と同じか，やや低めの位置にあり，丁度演劇の舞台を客席で見上げているかのごとく錯覚に陥る。サッカーを面白く観るのはこういうことなんだよ，とサッカーの発祥地で教えられたような気分だった。